

“In woods, in wanes, in warres  
she wents to dwell”

——スペインサーの女王賛歌——

竹村 はるみ

エドモンド・スペインサーの叙事詩『妖精の女王』（一五九〇年、一五九六年）をエリザベス女王崇拜の代表的文学として位置づける際、ベルフィービーは極めて扱いにくい登場人物と言えよう。

スペインサーは、パトロンに宛てた手紙の中で、エリザベスが「二つのお姿」を有することを考慮した上で二人のヒロインを作り出すに至った過程を述べている。それによると、ベルフィービーは「いとも徳高く、お美しいご婦人」としてのエリザベスを表すと定義され、帝王としてのエリザベスを示す妖精の女王グロリアーナとはわざわざ対比されている。詩人自身による余りに有名なこの解説をふまえて、ベルフィービーを処女王エリザベスの「ご婦人」としての私徳、すなわちその「類まれな貞節」への賛辞とするのが一般的な解釈になっている。ところが詩の中では、いわゆる「女王の二つの身体」は、必ずしもスペインサーが述べるように明確に二人のヒロインに振り分けられているとは言いがたい。ベルフィービーは、エリザベスの女性としての自然的身体を強調する一方で、それが帝王としての政治的身体と不可分であることを絶えず読者に認識させるのである。

ベルフィービーにおける女性賛美と君主賛辞の混交を考察する上で、第二巻第三篇は興味深いエピソードになっている。ベルフ

イービーは、森で出会った騎士ブラガドッチオーとの対話の中で、墮落した宮廷を痛烈に批判する。好色な騎士をやりこめるベルフィービーは、純潔の象徴として読まれることが多く、そのあからさまな宮廷批判はこれまであまり注目されることはなかった。しかし、ベルフィービーがエリザベスの表象であることを考えれば、その宮廷論は必然的に政治的な様相を呈するように思われる。と同時に、スペインサーがベルフィービーに託した「ご婦人」エリザベスの美徳は、伝統的な婦徳の称揚というよりもはるかに複雑な意味を付与されていることに気づく。本発表では、この場面のベルフィービーを通して描かれるエリザベス像に焦点を当て、スペインサーの女王賛歌がいかにか機能しているかを検証した。

エピソードの前半部は、森で狩をする乙女として登場するベルフィービーの長い描写になっている。灯火に例えられた目に始まり、象牙のような額、真珠のような歯といった具合に、乙女の身体の詳細が丹念に書き連ねられる。これは一見すると、ペトラルカ風恋愛詩に見られる *Madson* の詩法に忠実に従った描写であるように思われる。*Madson* とは、恋人の女性の身体各部を詳細に列挙することによって、その美しさを讀める修辭的技巧である。しかし、ここで留意しておきたいのは、「ご婦人」賛歌の典型とも言えるペトラルキズムの文学伝統からは逸脱したイメージもまた随所に見受けられることである。例えば、ベルフィービーの上半身を「全ての人々が縁の葉で飾り、崇める神々の神殿」に例えた比喩には、君主崇拜の理念が窺える。宗教改革の嵐をやつとくぐり抜けたばかりのエリザベスの治世において、女王を統一された教会の首長として誇示することは、君主賛辞の重要なテーマであった。スペインサーは、ベルフィービーの身体を民の神殿そのも

のに見立てることによって、エリザベスと英国国教会の繁栄をこ  
とほく図像を掲げているのである。

女性賛美を君主賛辞にすり替えるという手法は、エピソードの後  
後半部にも共通している。ブラガドッチオーは、雅な女性が森に  
暮らすことを訝しく思い、宮廷で生活することをベルフィービー  
に勧める。これに対して、ベルフィービーは、快楽に溺れきった  
宮廷を「逸楽の宮殿」と呼んで軽蔑し、名譽の住む「幸せの館」  
と対比させる。ここで、名譽は森に住む女性として擬人化されて  
おり、明らかにベルフィービーを指していると考えられる。貞淑  
な乙女の身体を難攻不落の名譽の館に例えるのは、やはりロ  
ンロの女性賛美の常套的なモチーフである。多くの批評家が指摘  
するように、これはエリザベスの貞節の美德に対して敬意を表し  
た場面であると解釈できる。このことは、抱きつこうとしたブラ  
ガドッチオーをベルフィービーが槍で脅して退けるといふ結末か  
らも明らかである。しかし、「幸せの館」と歓楽宮の対比に着目  
すると、再び君主崇拜の図像が浮かび上がる。ベルフィービーの  
名譽の館とは、エリザベスの「ご婦人」としての身体を表すだけ  
ではなく、宮廷の理想的なありかたをも呈示している。エリザベ  
スの宮廷は、勤勉な者だけが入ることを許される名譽の館として  
表され、虚飾と腐敗に満ちた「逸楽の宮殿」とは明確に区別され  
るのである。

この場面における女王賛歌のもう一つの特徴は、スペンサーが  
女王の分身であるベルフィービーに宮廷社会の批判を展開させて  
いることである。詩人はここで、宮廷諷刺と君主賛辞という、本  
来ならば相いれない二つのジャンルを同時に取り上げていること  
になる。これが可能であるのは、ベルフィービーが少なくとも表

面上は、女王としてのエリザベスからは距離を置いたヒロインと  
して設定されているためである。森の乙女という趣向は、墮落し  
た宮廷を矯正する女王を演出するための、いわば隠れ蓑の役目を  
果たしていると言えよう。この結果エリザベス自身は、スペン  
サーがその詩の中でしばしば糾弾した享楽主義的な宮廷の風潮と  
はあたかも無縁の存在であるかのように呈示される仕組みになっ  
ているのである。

以上、ブラガドッチオーとベルフィービーのエピソードを、女  
王賛歌というより大きな枠組みとの関わりにおいて考察した。ベ  
ルフィービーをエリザベスの公徳と切り離す従来の解釈は、この  
ヒロインに盛り込まれた詩人の政治的意図を見過すおそれがあ  
る。ベルフィービーが体現する貞節の美德は、婦徳へのおきまり  
の賛辞としてではなく、詩人が神話化する理想的な君主、及び国  
家の寓意として捉え直される必要がある。